

別府と政府密偵暗殺事件

日出町 佐藤 節

明治元年（一八六八）一〇月二四日、国東、速見、大分、直入郡の肥後藩預け地六九村三新田の日田県引渡しが終わった。幕末、尊王攘夷運動の高まりの中で、第二次長州戦争に幕府軍が敗れると、天領日田の郡代窪田治部右衛門は、警備の手薄に不安を感じて日田より遠い天領の村々を、強力な大名に預け守らせるよう幕府へ上申した。

翌慶応三年（一八六七）二月、寛政二十一年（一七六九）以来、島原藩の預け地になっていた別府の村々は、鶴崎に領地のある肥後藩預け地となっていた。

慶応四年閏四月一三日、明治政府の樹立によって下毛、日田、玖珠郡の天領は長崎裁判所（当時は行政機関）管内に編入され、ついで閏四月二七日の政体書公布によって「日田県」が設置された。初代日田県知事には、薩摩藩士松方正義（註1）が任命された。誕生当時の日田県は、豊後日田郡七九村、玖珠郡三二村、豊前下毛郡二村、筑前怡土郡六か村であった。ついで八月二一日、豊前、豊後の天領で諸藩に預け地となっていた村々が、日田県に編入された。このとき、別府の村々も新政府直轄の日田県となった。

肥後藩兵の引き揚げによって防備が手薄になった日田県では、大分郡光吉村の庄屋・首藤周三を郷兵取立方に命じ、兵隊を編成することにした。首藤周三は、変名を光吉光太郎といい鶴崎の儒学者毛利空桑や日田の咸宜園に学び、勤王の志士長光太郎（三州）一家を潜伏させた罪に問われ、慶応二年八月、日田で入獄。鳥羽

伏見の戦いの後赦免され、松方知事に登用されて、別府港の築港第一次計画をも手がけている。

明治二年正月五日、日田県より別府村の主だった者に対し、壮年の者は「郷兵」になるよう通達があった。翌六日には、南石垣村の屋田欣之助らが調練のため、日田へ出かけている。翌二月には隊命を松方知事の名前をとって「正義隊」とし、三月末までには隊員五〇名ほどの編成を終えた。正義隊の本営は西法寺におき、隊員には、ライフル銃、ドウラン（胴乱、弾入れ袋）、皮帯などが貸し与えられたことが「庄屋役宅日記」（鉄輪村、佐藤庄屋）に記されている。また日田県別府役所には、郷兵五名が詰めて警備に當った。昭和八年刊の『別府市誌』には、当時の歌として

十日稽古の調練は／笛太鼓にラツパにダンブクロ／草鞋もあれば靴もある／一小隊だけ進め跳び／草臥れて夕方は／鉄砲かたげて千鳥足
という俗謡が収録されている。

明治元年一〇月、会津若松城が落成。翌二年六月、函館五稜郭が開城して戊辰戦争が終わると、明治維新の新体制への確立が整備されはじめる。明治二年六月の版籍奉還・諸務変革の達・職員令の発布は藩体制を大きくゆさぶった。旧藩主は知藩事として新政府任命の一地方官となり、行政官職は大参事・小参事として、府藩県ともに統一された。藩の組織の改革、財政の改革、家臣団の俸禄の切下げと改革は急務であった。藩体制改革の柱は各藩の兵制の改革であり、現石一万石につき一小隊とされた改革に、諸藩は余剰の人員の整理に苦しんだ。

明治維新の中核となり、戊辰戦争を戦った「長州藩」には、正規の藩士以外の農民、力士、獵師、山伏、神官、僧侶から女性に

よつて結成された諸隊が数多くあつた。慶応元年三月、整理統合され小隊となつたこれら諸隊は、同三年二月には、大隊編成とし、「奇兵隊」「遊撃隊」「整武隊」「振武隊」「建武隊」「銳武隊」の六隊となつた。この外、正規の藩兵を加え、明治維新を戦つた長州藩の総兵員は約四千人といわれている（『防長回天史』）。

明治二年一〇月、長州藩は、常備兵を千五百人とし、兵の精選をはかつた。これに対し遊撃隊の中堅幹部である嚮導（横隊に編成された部隊の両翼を固める役）三人が、上官の弾劾書を提出した。隊の規則が乱れ、人心が動揺しているのは、長官の私曲（不正）の所業によるものとして一二か条の項目を掲げている。こうして遊撃隊は、結束して人員の精選を拒んだ。そこで軍当局は、遊撃隊を常備軍の編成から除外した。怒つた遊撃隊で一八五人が武器を持って山口から瀬戸内方面へ走つた。これに呼応して奇兵隊二五八人、整武隊二七五人、振武隊二〇二人、銳武隊一七一人をはじめ、不満分子が集り約二千人にのぼる脱隊兵が反乱を起したのである。

脱隊兵の要求の一つは、「洋式兵制」への反対である。諸隊成立当時から攘夷といつた体質を、全く捨て去るまでに至つていなかった。これに対し、幕末以来の諸外国との交渉のなかで、上層部はすでに攘夷思想を脱部して「開国、新文明の吸収への道」を歩き始めていたのである。

新政府の高官となつていた木戸孝允は、急ぎ帰藩して脱隊兵の鎮圧にあたり、暴動の中心人物三五人を捕えた。脱隊兵一三三人を死刑としたが、かなりのものが藩外へ逃亡した。それがまた各地で事件を起すのである（註2）。

明治二年二月、肥後藩領の鶴崎に「有終館」が設立された。豊後における肥後領、大分・直入・海部三郡二万三千石余の中心地

に設けられた鶴崎常備軍の本営である。隊長は、元治元年、京都で佐久間象山を暗殺した河上彦斉。強烈な攘夷論者である彼を国元におくことを危ぶんだ藩上層部が豊後に追いやった、とされている。

後述の高田は、鶴崎で尊王攘夷論者の儒学者・毛利空桑の助けを借り、活動を始めた。高田の下にいた中村六蔵は、反薩長運動を推進した雲井竜雄の同志である。東北の戦火が鎮まつた後、雲井が病に倒れ米沢藩に謹慎を命ぜられると、肥後に帰り誘われて鶴崎に来た。明治三年二月、中村は沢春三と名を変え、森藩の直江精一郎らと四人、豊後の各藩県を巡回して「豊後藩県会議」への参加を呼びかけた。三月一二日に岡藩で開かれた第一回の会議には、豊後七藩と日田県の代表が出席したが、第二回以後は肥後藩・日田県が参加せず、第四回の会議をもって、政府の「会議は相成らざる御規則」として藩県会議の開催は禁じられた。

こうしたなか、長州藩から脱隊兵騒動の主謀者の一人、元奇兵隊幹部の大楽源太郎らが豊後の姫島へ逃走し、さらに鶴崎へ潜入した。肥後藩の鶴崎隊長高田源兵衛は、かつて長州藩奇兵隊に属していたことがあり、大楽とは友人で毛利空桑とも親交があつた。

大楽は高田源兵衛に、奇兵隊再興のため、鶴崎の兵と武器・弾薬などの借用を申し込んだが、高田は鶴崎の兵や武器・弾薬は肥後藩知藩事からの預りものである、として拒否した。

そのうち、長州藩の搜索の手がのびはじめた。そこで危険を感じた大楽は、毛利空桑の手引きで岡藩にかくまわれた後、かねてから反政府的な動きをみせていた久留米藩の同志（古松簡二）をたよつた。

このような混沌たる不穏な情勢のなか、土佐の吉井小太郎という男が毛利空桑を訪ねてきた。中国、九州地方を巡歴して鶴崎に

来たというその男は、学識もあり、新政府にも批判的で、空桑らと意を通じるようになった。一夜酒を汲みかわし、時勢を論じた末、吉井は朝早くにわか姿を消した。空桑をはじめ有終館の有志は、これを怪しみ「政府の密偵か」と疑った。

そこで吉井の知人という、別府の矢田宏を呼び確かめると、沢田衛守が本名だと判った。高田源兵衛は配下の中村六蔵に沢田衛守の「暗殺」を命じた。矢田はそれに協力し、沢田の立ち回り先の森藩の城下から呼び返そうとした。沢田は動かなかった。そこで、矢田宅に身を寄せていた山本与一を森藩に行かせた。山本は長州藩報国隊の脱走者で、幕末、花山院隊に属し、宇佐郡御許山事件にも関係したが、たまたま同士の矢田宏の宅に身を潜めていたのであった。

彼はまた矢田とともに沢田衛守に会ったことがあり、沢田の顔をよく知っていた。山本は、沢田が探していた岡崎恭輔が、豊前香春に潜伏しているらしいからと欺いて、別府の旅館糸屋へ同伴した。岡崎は土佐の人で、明治二年九月、大村益次郎の暗殺にかかわったとして手配されていた人物である。

三月五日、山本は沢田とともに別府の糸屋をたつて豊前方面に旅立った。矢田と中村は、翌日、後を追って豊前へ旅立った。沢田に会ったのは同月十二日のことである。

国立国会図書館所蔵「大木喬任文書」のなかに「山本与一・矢田宏・沢俊三、一件書類」という史料がある。この史料には、明治三年一〇月から、明治七年末までの八篇の調書が含まれている。この調書に拠って「沢田衛守ノ暗殺ニ関スル経過（探索ノ次第書）」を追ってみた。

（前略）熊本藩支配地鶴崎ノ住、毛利到（空桑）其他、沢春蔵等其水師ヲ募テ陰ニ兵ヲ編ム、矢田、山本共ニ茲ノ徒ニアリ、然ニ午年二月、衛守鶴崎ニ到リ各名ニ面会、後屢別府ニ於テ兩人ト会ス、同二月二十八日頃何力頼ル議論シ、其詰朝衛守ハ同所ヲ発シ森藩ニ赴ク、矢田是ヲ聞キ飛脚ヲ以テ衛守ヲ呼帰ト雖、衛守不参ニ付、再ヒ山本ヲ遣シ強テ衛守ヲ同伴致サセ、三月四日別府村糸屋仁左衛門方ニ連帰リ、將又議論アリ、而後双方相解テ酒宴ス、其詰山本、衛守兩人同所ヲ発足ス、矢田ハ相残り其翌六日衛守ノ跡ヲ追テ発ス、後共ニ豊前錦原辺ヨリ中津ニ到リ（中略）

事件が発覚したのは、前記「探索ノ次第書」によると次のようである。

（前略）同十四日（明治三年三月）頃、矢田、山本ノ兩人別府糸屋ニ帰泊、且酒宴ス、糸屋・衛守ノ愛妓アリ、名ヲ兼松ト云、時ニ山本ハ衛守ノ刀ヲ帯ヒ来ルヲ以、兼松其故ヲ問フ、山本云、沢田ト交換、語不終矢田傍ヨリ勿云ト手ヲ拳テ制示ス、妓コレヲ怪ム、而已敢テ其故ヲ不問、斯テ其夜一泊、翌日二人共ニ鶴崎ニ発ス、其後数旬ニシテ衛守ノ横死傳説アリ、兼松聞テ右兩人下毛ト相違ナキヲ意想シ、喋云ヒシヲ人ニ諮ル、コレヨリ矢田、山本ノ名四方ニ流伝ス

また、後年、この事件の取調べにあたった司法省中検部坂本品理に、兼松は山本が酔つて片肌ぬぎになったとき、「白地ノ下襦袢脇ノ下ニ血痕」のあつたことを付け加えている。

事件七か月後の調書では、犯人は、矢田、山本の二人とされている。矢田は、速見郡石垣村の医師・矢田淳の長男で、蘭法医矢田連の孫、幼い頃から叔父矢田希一の「対岳楼」に学び、十七才で日田咸宜園に入門、鶴崎の毛利空桑に師事する。勤皇の志が篤く、幕末、長三州らと反幕運動に加わり、日田の幕吏に迫られて長州藩に逃げ込み、報国隊に奇食、慶応三年九月、勤皇拳兵の武器

調達のため同志とともに長崎に行き、十二月五日には日田郡代支配下の天草代官所を襲い、八千三百両の金を奪った。勤皇志士隊の主領、花山院家理とともに慶応四年一月十四日、暴発を恐れた長州藩の手に捕えられた（山口県立図書館所蔵）「花山院家理郷隨従え面々暴動一件」。後に許されて帰郷していたのである。

事件後、京都・大阪に旅行していた矢田は、六月帰郷すると、日田県官吏の手によつて自宅で捕えられた。取調べを受けた矢田は、沢田衛守殺しは、山本と鶴崎有終館にいた沢俊三（春三）が行つたものであること、山本は矢田が捕えられたとき矢田宅に潜んでいたこと、沢は五六月頃、江村秋八と変名して東京へ行ったことなどを申し立てた。

日田県では、事件の前夜、沢田らが宿泊した四日市の奈良屋林兵衛を呼出し、面通しをさせた。林兵衛は、矢田は奈良屋に來た人ではないとして、「客ハ三人ニテ、一人ハ肥後ノ言癪、一人ハ長州言癪ナルハ慥ニ見留メ、外一人ハ何レノ人ナルヲ見分ケカタシ」と証言している。そして、男が「夜分行灯ノ側ラニ刀ヲ抜キテ具居□□（不明）ヲ前ノ兩人ニテ頻リニ襲メ」ていた、と述べている。この結果、沢田の刀を帯びていた山本は「確証アリ」とされたが、他の一人は矢田か沢か決めることができなかった。

山本、沢の捜査は難航した。山本は矢田宅を脱出した後、髪を剃つて馬関の某寺の僧・洗心と名のり、白石某の塾に潜伏。十月に中津の古道具屋・岡部屋に沢田から奪つた刀を売り、上方へ逃亡したことが判明した。そのため、馬関にいる山本の老母や兄の周辺に目を注ぐことになった。沢は五月頃、江村秋八と名を変えて上京したという情報を得たのみで、その消息は不明であった。

明治六年四月、日田の獄舎にあつた矢田宏が重要な証言をした。

「山本与一・矢田宏・沢俊三 一件書類」にある明治六年四月十四日付けの「矢田宏口書（供述書）」によれば、

（前略）旧日田県ニ於テ入牢中、旧久留米藩下村不存庄屋ノ由寺崎三矢吉（中略）ト申者、長州脱走關係一件ニ付、一昨辛未年（明治四）三月頃入牢ニ相成候由ニテ、私入居候隣間ニ入獄之節、同人同国ノ者ニテ河島澄之助（註略）ト申者ニ私面会致候ニ付、同人ヨリ私ノ姓名ヲ承リ居候由ニテ、牢中境ノ板越ニ種々雑談同人申候ニハ、旧熊本藩士ノ由平井丈之助事変名沢春三儀、於東京広沢参議殿ヲ暗殺致候儀ニ關係有之旨ニテ、旧久留米藩ノ人古松簡二同道ニテ東京ヨリ帰県ノ由（以下略）というのである。

明治四年一月九日、参議の広沢真臣が暗殺された。政府の懸命なる捜査にもかかわらず、犯人は挙がらなかった。これに沢春三が關係あるというのである。

この報告を受けて司法省は、六月には司法省出仕、林尚吉と司法省中検部坂本品理を大分県に派遣、沢春三を中心に沢田衛守暗殺事件の再調査をはじめた。林尚吉は、明治二年に日田県権少属、ついで同五年大分県少属、さらに鞆獄係十二等出仕、ついで司法省出仕となった人物である。坂本品理もまた日田県史生から司法省に転じたもので、大分県の事情にくわしい両者が捜査の中心となったのであろう。

明治十年十一月十六日、長崎で西南戦争に加担した熊本協同隊の關係者として中村六蔵が捕えられた。そして、この中村六蔵が沢春三であることが判明した。東京へ護送され厳しい取調べを受けた中村は、広沢参議暗殺を自供した（『改訂肥後藩国事史料卷九』）。しかし、大審院での裁判で自供をひるがえし、広沢事件については「無罪」となった。その三か月後の十三年六月一日、大審院別調所において、沢田衛守殺害について、左記のような判決「其方儀、明治三年三月旧熊本藩所轄豊後国鶴崎有終館ニ於テ、

亡高田源平等当時ノ施政ニ不満ヲ懷キ不軌(反逆)ヲ図ルノ際、同志毛利到ガ旧高知藩士沢田衛守ヲ同志ト誤認シ、其内情ヲ吐露シタルニ因リ該事情ノ発露ヲ惧レ、之ガ口ヲ緘スル為メ、源平方指使ニ因テ衛守ヲ殺害シタル科、禁獄十年申付候事」(『新聞集成明治編年史(四卷)』を受けている。

また「中村六蔵ガ衛守ヲ殺害シタル時、加功セザルモ俱ニ其場ニ至ル科、禁獄三年ニ処スベキ処、数年ヲ経テ官ニ発覚シタルニ依リ免罪」となった「広島県安芸国豊田郡御手洗町平民 村尾敬助」こそ、山本与一である。

明治二十二年三月、帝国憲法発布の大赦によつて釈放された中村六蔵は、熊本に帰ると文学精舎という学校を建て、教育に精進するかたはら「東洋純正哲学」という著書を作っている。しかしこの学校は四年で廃校となり、不遇なうちに死を迎えた。

石垣村出身の矢田宏は、この密偵暗殺事件では刑罰を受けなかつたようである。慶応四年、花山院家理隨従の暴徒として長州藩に捕えられ、天草代官所を襲い八千三百両の金を奪つた時も、これといった刑罰を受けずに釈放され、西南戦争では中津隊の一員として戦い、鹿児島で捕えられたが懲役二年の刑ですむ。出所後、新潟県師範学校で教鞭をとるなど、今日では考えられないような人生を歩いている。別府の生んだ異常な人物であろう。

編集部―登場人物(プロフィール)

(註1) 松方正義

(天保六―一八三五年―大正一三―一九二四年)

薩摩藩士。初代日田県知事、第四・七代総理大臣、枢密顧問官。

初代日田県知事(明治二年七月―同四年六月)の時、別府旧棧橋

(旧港)を金二万両出して築造したり、日田金で養成館事業(現福祉行政)や生産会所(現金融・銀行事業)などの実績を遺した。明治一四年、大蔵卿(のち大臣)として「松方財政」「松方デフレ」と呼ばれる緊縮増税政策と日本銀行による兌換制を実施した。明治大正期を通じて最大の経済財政通として、また大久保利通亡きあと薩摩閥の巨頭としても大きな影響力を維持した。大正六年以降は内大臣として大正天皇を輔弼し、同一三年九〇歳で没した。

松方日田県政を讃えた「記念碑」(大正一三年建立)が日田市大原神社境内にある。

(註2) 井上聞多(のち馨)

(天保六―一八三五年―大正四―一九一五年)

長州藩士、のちに馨と改名。伊豆韮山(現静岡岡)の江川太郎左衛門塾で砲術を学ぶ。慶応元(一八六五)年、高杉晋作らと下関開港を画策、過激な攘夷論者に切られて重傷を負い、海路別府に逃れて湯治宿・若松屋に潜伏した。

当時、幕府領で島原藩の預け地であった別府村は監視の目が緩やかで、年間十万人にも及ぶ入湯客が来ていたため志士の潜伏には好都合であった。その後、長州藩の藩論が開国・倒幕に傾くと長州(山口)にもどり、幕末の倒幕運動で活躍した。

後年、明治政府の外務・内務・大蔵の各大臣を歴任した井上公が別府の若松屋を訪ねた際、往年の苦難を回顧して「千辛萬苦之場」の扁額を遺した。当時の若松屋の旧邸が現在、別府中央公民館右前に保存されている。

【執筆】佐藤節(たかし)氏 日出町出身、小中学校校長を経て定年退職。『大分県史』(近代篇第十六―二十卷)執筆など論稿多数。